

北九州における海難防止に関する天気俚言* (その二)

菊池繁雄** 尾崎康一*** 山口 享**** 宮園実康*****

アンケートの 6

夕焼け, 朝焼けは, 天気はどう変わるか.

〔一般的解説〕一般的にいつて, 夕焼けは, 西の空が晴れていることを表わし, 朝焼けは, 東の空が晴れていることを示すものである. その焼け具合には, 空が晴れていて美しく焼ける場合のほか, 雲が異常に赤黒く色どりをする場合がある. 後者は, 台風などのはげしい気象擾乱が近づいているときに, しばしば現われる悪天の兆である.

天気は一般に, 西から東へと移ってゆく. しかも, 日本の上空では, 西風が強いので, 高気圧や低気圧は, すべて西から東へと移動する. このために, 西の方が晴れていれば, “晴れ” の天気が次第にこちらへ移ってくると考えてよく, だから, 夕焼けは大抵の場合, “晴れの兆” と言われるのである. したがって, 秋の夕焼けだけが, とくに晴れるとは限らない.

春, 秋は, 移動性高気圧と低気圧とが交互に通過し, 高気圧が来ると美しい夕焼けが出て, 翌日は良い天気となる. そうして1~2日すると, 低気圧や前線などが来て, 雨が降るといった具合であるから, 夕焼けと天気の関係が比較的是っきりしている. 冬は, 一般的に西の方が晴れていても, 寒冷前線が近づいて, かえって晴れることもある. 夏は, 太平洋高気圧の中に入って, 毎日晴天がつづくので, とくに夕焼けによる晴天の印象が, 薄らぐのではないと思われる.

朝焼けは“雨の兆”という俚言が多いが, これは, 東の方が晴れていても, その晴れの天気は, 東方へ去ってしまい, こちらに移ってこないからである. しかも, 朝焼けをしているときは, 西の方はむしろ, 暗い異常な雲が出ていることが多いので, まもなく, その雨雲がこち

らに移ってきて, 雨を降らせるようになる. とくに, 台風などが近づくと, 赤黒い異常な焼け方をする.

〔回答と解説〕次に各地の俚言を掲げたが, 冒頭解説で不足のものに, それぞれ簡単な解説を補足した.

(1) 秋の夕焼け鎌をとけ. (佐賀関, 須佐, 松浦)

秋の夕焼け鎌といで待て. (福岡)

秋の夕焼け鎌といで待っとけ. (鐘崎, 野母崎)

秋の夕焼けは天気. (平戸, 香々地)

秋の夕焼け, 翌日天気. (豊玉村)

秋の夕焼けは晴, その他の季節は雨. (須佐)

明日は上天気だから, 稲刈の仕事をせよ, という意味であるが, 冒頭解説でのべたとおり, 夕焼けが晴の兆であることは, 秋のみに限らない.

(2) 夏の夕やけ, 溝はずせ. (松浦)

夏の夕焼け, 雨が降る. (豊玉村)

夏の夕焼けや, 蓑を着れ. (佐賀関)

この俚言の夕焼けは, 異常に強い夕焼けを指すのであろう. 夏, このような夕焼けが現われるのは, 台風接近の兆であるから, 大雨に備えよ, という意味かと思われる. しかし, 台風によっては, 暴風だけで, 雨は大したこともないことがしばしばあるので, 一応の用心をするということの意味があろう.

(3) 春の夕焼け, 川越して待て. (福岡)

春の夕焼け, 川渡って待っとけ. (鐘崎)

春の夕焼けは大雨となる. (平戸)

春の夕焼けは雨. (香々地)

冒頭解説でのべたとおり, 春の夕焼けが悪天への兆である理由は判らない.

(4) 夕焼けは天気が多く, 海上はウネリが強くなり, 西風がよく吹く. (佐世保)

この場合のうねりや, 西風については判らない.

(5) 夕焼けのときは“西がこうけた(焼けた)けん, 明日はよか天気ばな”という. (野母崎)

冒頭解説のとおりである.

(6) 夕焼けで, 東風が強いときは, 海がシケる. (中津)

美しい夕焼けは晴天の兆, 黒色をおびた夕焼けは悪天の兆. (豊後高田)

* On the Weather Proverbs to Prevnt the Sea-damages at North Kyūshū District.

** Shigeo Kikuchi, 長崎海洋気象台

*** Kōichi Ozaki, //

**** Tōru Yamaguchi, 秋戸海洋気象台

***** Saneyasu Miyazono, 長崎海洋気象台

—1963年8月26日受理—

東風が強かったり、赤黒い夕焼けは、異常夕焼けをあらわしている。それも、普通の低気圧ではなく、台風などの接近を意味しよう。

(7) 朝焼けは、気象の変化がはげしい。(鐘崎)
朝東方が深紅のとき、気圧低く、雨の前ぶれ。(福岡)
朝焼けは周期雨となり、雨後風となることが多い。
(須佐)

朝焼けは雨が近い。(佐世保、平戸)

朝焼けは、その日は雨じゃ。(野母崎)

朝焼けは、台風が近い。(野母崎)

朝焼けは、風雨強し、寒中は北西の風強く、風波の前提である。(中津)

朝焼けは、一般に天気変化の兆、紫色の朝焼けは雨。

(豊後高田)

朝焼けが悪天の兆であることは、冒頭解説のとおりである。とくに、台風のようなはげしい擾乱が近づくと、異常な焼け方をする。

(8) 朝焼けは雨、夕焼けは天気。(新宮)

秋の夕焼けはよし、朝焼けは荒天が多い。(新宮)

朝焼けは天候がくずれ、夕焼けは天気がつづく。但し梅雨期は反対。(仙崎)

夕焼けは、明日は天気、朝焼けは雨。(三和町)

夕焼けのときは、翌日好天気、朝焼けのときは、その日のうちに天気がかくずれる。(鹿町町)

朝焼けが雨天の兆、きれいな夕焼けが晴天の兆であることは、冒頭解説のとおりである。仙崎でいう、梅雨期には反対ということは判らない。

アンケートの7

その他天気に関連のある俚言

1. 風向と天気に関する俚言

(1) 煙が西へなびくと雨、東へなびくと晴。(豊後高田)

この俚言は、東風が吹けば雨、西風が吹けば晴となる意味である。一般に、低気圧の前面では、東寄りの風が吹いて、その後雨が降り、通過後では、西寄りの風が吹いて、天気が回復するのが普通である。また、前線が通過して、風向が北西になると、天気が回復してくるので、西風は一般に晴天の兆でもある。

(2) 春の雨東(春の東風は雨になる)。

秋西水桶(秋の西風は時雨になる)。

秋東池はず(秋の東風は晴つづき)。(福岡)

一般に東風は、高気圧の後側と、低気圧の前面で吹き易い。だから、東風は天気が下り坂の場合に多い。しか

し、高気圧が停滞しているため、東風が吹いていても、仲々天気が悪くならない場合もある。また、低気圧が近づいても、地形的に東風にならない所もあろう。いずれにしても同じ東風でも、春は雨となり、秋は晴れる理由は、これだけではよく判らない。

西風は、低気圧や前線などが通過した後で吹き易く、通過後しばらくの間は雨が残る。しかし、このような現象は、秋のみに限らない。

(3) 梅雨後南西の風多く、“白はえ”は晴、“黒はえ”は雨。(福岡)

“はえ”とは南風をいう。梅雨が終わると、太平洋高気圧におおわれて、南風が卓越し、夏型の天気となる。これは夏の季節風といわれるもので、晴天がつづく。これが“白はえ”である。しかし、南風は、低気圧が近づきときにも吹く。始めに南東風が吹き、次に南西風となることが多い。そうして、この南西風の後は、寒冷前線が近づいて、黒い雲がやって来て雨となる。これが“黒はえ”であろう。

(4) 北風なら北風が、西風なら西風が吹いており、雨が急に強くなり、風が急に衰えたときは、その反対の風が急に強く吹く。(豊玉村)

一般に、低気圧の場合は、南風から北風に、東風から西風に変化するのので、この俚言は「例えば」として考えたい。地形的に見ても、豊玉村では、全く逆に吹くかどうか疑問がある。また、雨の前に風が吹き、雨が強くなると風が衰え、風が衰ってから再び強くなるという現象は、温暖前線にあるが、これに当てはまるかどうかは判らない。一般に雨が強い時には、風も強い例が多いからである。

(5) あなせ(北西風)の夜風。(三和町)

地形的な影響かと思われる。夜間は、陸地から海へ吹き出す陸風が、北西風と相殺して弱めるのではないだろうか。一般に、前線などが通過して北西に変わった場合、冬の季節風以外は、次第に弱まるが、この場合では「夜」を指すので、地形的なものと考えたい。

(6) 北東風やソーメン(雨)、南風の風や出しじゃ。(野母崎)

北東風が吹くと、雨があるということは、東支那海を北上する低気圧の前面に当たることを意味し、雨が近い。「南風は出し」というのは、船出のことであれば、一寸疑問がある。何故ならば、南風が吹く場合は、低気圧の中心の南側とか、寒冷前線の前面に当たるからが多いから、天気はむしろ下り坂となり、船出には危険である。

(7) タズの風(朝焼けもなく、北東風は弱く、昼頃一応
 凪いで、その後西風が吹く)は良い天気。(野母崎)
 このような風向の日変化は、移動性高気圧におおわれ
 たような晴天の日における陸風、海風を表わしている。

2. 上空の風と天気に関する俚言

(1) 星がちらちらするときは、その方向から風が吹き出
 す。(仙崎)

(2) 朝星のけいけいと光るは雨の兆。(豊後高田)

星がちらちらするということは、上空で風が強いこと
 で、低気圧の前面に起こるのが普通である。この風はや
 がて地上に降りてくることがあるから、地上でも強い風
 が吹き、雨が降ることもある。しかし、星のちらちらす
 る方向から吹き出すとはいえない。

(3) 夕日の入りが高い時、太陽が非常に光れば風にな
 る。(福岡)

(4) 日の出、入日が水平線にキラキラするときは嵐日
 和。(野母崎)

太陽が光るというのは、空気が揺れていること。即ち
 上空の風が強く、かつ、乱れていることである。やが
 て、この風は地上に降りて、強風を吹かせることになる
 う。

しかし、一方、太陽が光ることは、空気が澄んでいる
 という意味にもとれる。見透しが良いことは、地面付近
 に水蒸気などが溜らないで、乱流によって、どんどん上
 空に運ばれることを示している。だから、この場合、地
 上の風が強くなるということとは、直接には結びつけて
 考えることが難しい。

夕日の入りが高いことと、風とは関係づけにくい。

(5) 日没の頃、太陽が動いて見える時は、翌日は大い
 シケとなる。(鹿町町)

日没の太陽は、上空までの厚い空気の層を通して見る
 ことになる。この太陽が動いて見えるのは、結局上空に
 強い風が吹き、空気の乱れが大きいことを示している。
 このような状態は、前記した(1)及(2)と同様であるから、
 強風の兆である。

3. 台風の風向に関する俚言

台風は、いろいろの径路を通るが、概して、秋以前は
 西日本に、秋以後は東日本に来ることが多い。台風は、
 反時計廻りに風が吹き込む大きな渦巻であるから、台風
 がその土地の西側を通ると、風が強くなる傾向がある。
 その時の風向の変化は、台風の中心が九州の西側近くを
 通るときは、北東→東→南東→南→西へと変わり、この
 ときの風が強いのである。東側を通れば、北東→北→北

西→西へと変わる。

上に述べた径路は、あくまで平均的な話であって、実
 際には必ずしも一定しているとはいえない。秋以後で
 も、東海を北上する台風もあれば、夏前の6~7月頃で
 も、九州の東側を通るものもある。だから、次に掲げる
 俚言のうち、あまり過信してはいけないものがある。

(1) 二百十日以前の大風は、辰己の風(南東風)、以後
 は北の強風多し(これを青北、又は、盆北ともいう)。
 (福岡)

秋以前に南東風が吹くのは、台風が九州の西側を通る
 ことを、秋以後北風が吹くのは、東側を通ることを意味
 するが、冒頭解説のとおり、実際には必ずしもこの通り
 ではないから、十分注意しなければならない。

(2) 当地の台風は、北東風が先に吹く。(野母崎)

(3) まえちゃん日和(東風が一日中吹く日)は、台風の
 前ぶれ。(野母崎)

(4) 台風の前ぶれには、東風が強まる。(香々地)

台風が、九州の南方にわたって、北上しつつあるとき
 は、九州では東~北東の風が吹く。したがって、この風
 が次第に強まることは、台風が南から接近しつつあるこ
 とを意味する。

(5) 台風のときは、かわし(南~南西の風)が強い。

(野母崎)

台風の中心が、九州の西側を通過して、朝鮮あるいは
 日本海へ抜けると、冒頭解説でのべたように、風向は順
 転して南西寄りに変わる。この風はいわゆる“吹き返し
 し”とあって、非常に強いのが特徴である。したがって
 湾が南に開口しているような地形の所では、台風が接近
 中に吹いていた東乃至南東風は、大して風当たりもなか
 ったのに、台風が通過するや、急に南乃至南西の暴風がま
 ともに当り、さらに、この風による高潮などが押し寄せ
 て、大きな災害を被むることが珍らしくない。とくに注
 意をしなければならないことである。

4. 台風とウネリに関する俚言

台風の中心付近では、はげしい暴風のために、著るし
 い風浪が発生しており、それが次々と四方に伝播してゆ
 く。しばらく進むうちに、波長の短い波は消失して、
 波長が長い波のみが残って、いわゆるウネリとなって、
 千キロメートル以上も伝播してゆく。ウネリの速度は、
 台風の進行速度より遥かに速いから、台風の中心は、ま
 だ非常な遠方であって、もちろん風などは吹いていない
 ような沿岸で、まずウネリがやってくる。だからウネリ
 が現われることは、台風接近の兆といえるのである。九

州西沿岸では、台風が琉球諸島に達すると、かなりのウネリが現われることが多い。

次に掲げる俚言の中で、根波とか、海がふくれるという言葉は、このウネリの表わしたものである。

- (1) 根波(ウネリ)が高くなれば、強風のおそれがある。(鐘崎)
- (2) 風がないのに、ウネリまたは瀬波ができた時は、シケの徴候。(豊玉村東)
- (3) 海がふくれりゃ、シケとなる。これを“ぞうくり”という。(三和町)
- (4) 浜にネリ(ウネリ)が大きくなると、シケがくる。(野母崎)
- (5) 台風のくる1~2日前から、ネリが大きくなってく。(野母崎)

いずれも、台風の先駆として、1~2日前にウネリがやってくることを表現している。

- (6) 夕方、東から西に、天上界の赤く焼ける妙な雲が出たとき(これを“みようじょう”が立つという)、海がふくれてくる。大ウネリがくる。(野母崎)

雲が、東から西に赤く焼けるとあるが、これが“雲一本”であるかどうか判らないが、台風の前兆としての異常夕焼けを意味している。大ウネリが先行していることは、冒頭解説のとおり台風接近の兆である。

- (7) 西風は、波と風と同時にくるが、北風は、ウネリが風より2時間位早くなる。(佐須奈)

一般に風浪は、風と波とに時間差が無いが、ウネリは冒頭解説で述べたように、時間差が大きい。佐須奈は対馬の北端で、北に朝鮮半島があり、西は東海に、東は日本海につづいている。この俚言の季節がはっきりしないが、冬の季節風によるウネリならば、北西風と波とが殆んど一しょに来る。しかし、北風の場合は、日本海で発達した低気圧によって生ずる波も考えられるが、波が北風に先行することは考えにくい。したがって、この北風のウネリは、東海から西日本方面を横断するような、台風によるものと考えたい。それにしても、ウネリと北風の時間差が2時間位は少し短かいように思われる。何れにしても、この地の地形の影響もあることであろうから、さらに詳しく調べる必要があろう。

5. その他台風に関する俚言

- (1) 潮が下げる頃、台風が風ぐ。(野母崎)
- (2) 大潮の時の台風は風が強い。(野母崎)

潮汐と風速の関係は判らないが、秋の大潮の頃になると、本那に接近し、又は上陸する台風が多くなる傾向に

あるので、暴風が吹き易いことはいえよう。

6. 突風に関する俚言

- (1) 沖に竜巻を見れば、突風のおそれがある。(鐘崎)
竜巻の付近は、風速50メートル以上の強風が吹きまくり、突風を伴なう。しかし、この竜巻は遭遇しなくても、竜巻があることは、その付近が、非常に突風の起こり易い状態にあることであるから、十分に注意しなければならない。

- (2) 冬の南風はやのかぜにゃ船出すな。(三和町)

冬季、南風が吹くのは、低気圧の暖域または、移動性高気圧の後面に入ったことを示している。これは、間もなくやってくる寒冷前線の前面に当るので、この前線に遭遇して突風に会う危険が多い。だから、この俚言は、冬の突風をあらかじめ避けるためとして意味がある。

- (3) 四季の突風の方向は、

春：南西風、夏：なし、秋：北風、冬：北西風。(三和町)

春の南西の突風は、東海から日本海へ進んで、発達した低気圧に吹き込む突風をいい、秋、冬の北又は北西の突風は、季節風に伴なうものを表わしている。しかし、冬でも南西の突風があり、春でも寒冷前線による突風があるから、この俚言を過信してはいけない。

- (4) 年越しより45~50日頃に西上り(突風)。これを“きゃー寄せ”という。(野母崎)

野母崎では、2月中、下旬頃に突風が起こり易く、また無風だったり、急に南や西の風が吹いて、変化が烈しく、気温も下がって寒い。瀬尻(枕島灯台)から野母の正面にくる風が最も強いという意味である。

これは、初春の頃、東海で発達した低気圧に伴なう寒冷前線の前面付近、あるいは、不安定線に発生する暖気突風を意味する。この突風が通ると、気温は急降下し、風向は南寄りか、北西に急変することが多い。野母崎では、南が海に開いているので、南寄りの風当りがとくに強いものと思われる。

- (5) 冬、西から黒くなって突風が来た時、風はだんだん北に変わる。北になると雲が白けて風が風ぐ。(野母崎)

これも(3)と同じく暖気突風を表わしている。突風が過ぎると、雲は白っぽくなって風が風ぐ、天気は回復する。

- (6) 冬のベタ風べたかぜが一番恐ろしくせもの。(野母崎)

冬のベタ風べたかぜは、非常に天気の良いときで、移動性高気圧の中に入ったことである。しかし、この後からは、気圧の谷や、低気圧がくることが多く、また、突風を伴

い易いのである。だから、冬のベタ風ぎは、むしろ突風の兆として、特に注意しなければならないのである。

7. 雲と天気に関する俚言

(1) 出しの雲（高い雲）が、東から西へ飛べば台風。

入れの雲（高い雲）が、西から東へ飛べば良い天気。
（野母崎）

台風や低気圧の前面では、東寄りの風が吹くので、雲は東から西へ飛ぶが、台風のみに限らない。また反対方向に飛ぶのは、西風が吹いていることを示すので、天気は回復に向かう。

(2) 朝曇は天気、朝晴は大雨になることが多い。（豊玉村、豊後高田）

ここでいう朝曇は、いわゆる低気圧や前線に伴う曇を指すものではないと思われる。温暖地方の海岸では、晴天のとき、陸風、海風がよく発達する。この海陸風が、朝方交代をするが、その時に、海岸付近に弱い前線が出来ることがある。そのため、一時的に曇を生じて、時には僅かであるが、雨がぼらつくこともある。“朝曇は天気”という俚言は、それを述べたものではないだろうか。

次の“朝晴は大雨”という俚言の、晴というのはいわゆる青空がしばい出るような好天気を指すのではなく、一時的に雨が止んで、一寸時間が去る程度のものを、朝曇の対句として、朝晴と表現したのではないだろうか。そうであるならば、この俚言には多少根拠がありそうだ。それは、大雨が降る半日位前に、一時的に降雨が弱くなることのあるからで、あるいは、そのような現象を指しているかも知れない。

(3) 西から雲が上がっても、時々持ち直したときは、良い天気がつづく。これを“西上りの（突風）くるてち思うとつたて、持ち直したけん。日和のするばな”という。（野母崎）

天気は一般に西から移ってくるが、比較的天気の良い部分、すなわち、気圧の峯の中に入っているときは、少しくらい西の空に雲が出て、まとまった悪天の区域が近づかないから、天気は仲たくずれないものである。

(4) 西の山に雲がかかると雨。（豊後高田）

西方の天気が悪いことを示すので、やがて雨が降る可能性が大きい。

(5) 梅雨時に、高い雲が東から西へ動くのは、天気よくなる兆。（香々地）

東風が吹くのは、普通低気圧の前面に当たり、天気が悪くなる兆であるので、この俚言は一見反対のことをいう

ようであるが、梅雨期には少し異なる。その理由は次のようである。

梅雨期には、本邦付近は、東西に延びる前線が停滞する。そうして、この前線の北側では東寄りの風が、南側では西寄りの風が吹く。だから、東寄りの風が吹くことは、その地点が前線の北側にあること、即ち、梅雨前線はその地点の南の方にあることを意味する。したがって天気はむしろ良い方に向かっているわけである。

(6) 笠雲が山にかかると雨、波状雲も雨の兆。（香々地）

山に強い風が吹きつけられると、山頂に帽子をかぶせたような雲が出来ることがある。これを笠雲という。これは上空の風が強いこと、また湿っていることを示す。だから、西方の山頂に笠雲がかかると、やがて、この風が地上に降りてくることがあるので、強風や雨の兆となる。

波状雲とは、その形が海の波、あるいは畠の畝を思わせるような形の雲をいう。この雲は、巻積雲、高積雲、層積雲などに現われ、いずれも、低気圧や前線の前面に出る雲であるので、雨の兆といえる。

(7) 姫島上空に雲のあるときは雨。（香々地）

姫島は香々地の東北東にある（第1図）。その上空に雲があると、それが東風に乗って、この地方に来て、雨を降らせるのではなからうか。これは低気圧が、九州南部から四国沖へと進行するような場合に当たる。

(8) 入日の下に雲のあるとき、日の高入りはシケ。（野母崎）

入日の高入りとは、どのような状態か、はっきり判らないが、西の水平線に雲があって、それに日が入るのであれば、その雲がやがてやってくるであろう。若しその雲が、低気圧や前線などに伴った雲であれば、シケとなる。

8. 日暈、月暈に関する俚言

月に笠がかかって見える場合も、日に笠がかかって見えるのも、もとは同じ現象である。笠のかかる雲は、非常に高い、気温の低い所において、氷の粒で出来ている。これに日や月の光がある角度で当たると、屈折して、光の輪が出来て笠のようになる。このような雲は、巻層雲や巻雲と呼ばれる雲で、低気圧や台風などのずっと前方に出来ることが多い。だから、笠がかかると、天気が悪くなる兆といわれるのである。そのゆえ、日笠が雨の兆で、月笠が晴の兆であると分けるのは疑問である。

なお、巻雲や巻層雲は、晴天にも現われ、必ずしも悪天の兆ではないから、この俚言をあまり過信してはいけ

ない。

- (1) 月に笠がかかれば晴、日に笠がかかれば雨。(仙崎)
- (2) 月が笠をかむれば近く風が吹き、日にかむれば翌日は雨。(豊玉村東)
- (3) 月が笠をかむれば雨になる。(須佐)
- (4) 日暈、月暈は雨の兆。(豊後高田)

9. 霧に関する俚言

- (1) 霧が多くかかるときは、無風が多い。(豊玉村東)
低い霧を生じ、すぐ消えるのは晴。(豊後高田)
朝霧、朝霜は晴。(豊後高田)

ここにいう霧は、好天気の後半から早朝にかけて発生する輻射霧である。これは、地面付近が冷えて、高い所よりも、低い所で気温が低くなる現象——これを気温の逆転という——のときに発生するものである。移動性高気圧の中に入ったとき、盆地のような地形で出来易い。冬ならば、さらに霜がおりる。

やがて太陽が昇り、気温が上がるにつれて、この霧は蒸発して消えてしまい、日中は晴天となる。

このような状態のとき、もし強い風が吹くと、逆転が崩れて、霧は吹き払われてしまう。したがって、この種の霧は、無風状態に近い静かな時でないと発生しない。

- (2) 濃霧のときは雨、又は東風が強くなる。(須佐)

この霧は、輻射霧と異なって、前線に伴う霧と思われる。したがって、かなりの風が吹き雨も降る。しかし風があまり強くなると霧とならずに、低い層雲などになってしまう。ここで東風が強くなるのは、地形的な原因によるのではなからうか。例えば、日本海の冷たい空気が北東風となつてはいい、須佐の南方に前線が停滞しているような場合が考えられるが、詳しくは現地での調査を待ちたい。

- (3) 霧深き朝は晴の兆、夕霧は雨の兆。(豊後高田)

前者は、輻射霧を指すもので、前項(1)で説明したように晴天である。しかし、夕霧は、前項(2)で説明した前線霧のことが多く、雨になり易い。

- (4) 露や霜が多く降りた時は、近く雨となる。(豊玉村東)

露や霜が多く降りる日は、前項(1)で説明したように、移動性高気圧におおわれた日である。この後には、概ね気圧の谷が近づいているので、翌日か翌々日には、天気は悪くなることが多い。とくに、春秋は、このような天気変化が割合規則正しいから、露の日の後で雨になる可能性が大きい。しかし、夏のように、中緯度高気圧帯におおわれたときには、露が降りても、天気は仲々悪くな

らない。

10. 視程と天気に関する俚言

- (1) 遠山の近く見えるときは雨の兆、遠く見えるときは晴の兆。(豊後高田)
- (2) 夜の電灯が常よりも明るく感ずると、翌日風が来る。(豊後高田)

遠山が近くに見えたり、電灯が明るく見えるのは、空気が非常に澄んで見透しがよいことである。見透しがよいのは、地上付近に乱流が起こっていて、水蒸気がどんどん上空に運ばれていることを意味する。これは低気圧の前面に起こる現象だから、風雨の兆となる。反対に見透しが悪いのは、前節(9)で述べた逆転層が出来ていて、水蒸気や細かい塵などが、地面付近によどんでいる場合で、高気圧の中に多く、したがって天気は良い。

11. 気温と天気に関する俚言

- (1) むし暑いときは雨の兆。(豊玉村東)
- (2) 蒸す日の夜は雨。(豊後高田)
- (3) 天気晴朗にして、蒸暑きは不安の兆。(豊後高田)

気温が高く、湿度が大きいときは、人はむし暑く感ずる。さて、雨は、このように湿った空気が、上昇するときに生ずるものであるから、むし暑いことは、雨が降り易い状態の中にいるともいえる。ところで、このような空気を上昇させる原因の一つに、低気圧があるが、“むし暑い”区域は、低気圧の中心の南側に当る“暖域”と呼ばれる部分である。したがって、“むし暑い”ときは、低気圧の暖域に入っていることが多く、間もなくやって来る寒冷前線による雨が降るようになる。

12. 雷に関する俚言

- (1) 春の一雷は強風を伴う。(福岡)
春、秋の雷は、界雷といって、前線付近に発生する。これは、冷たい空気が、暖かい空気の中に突入するとき(寒冷前線)とか、暖かい空気が冷たい空気の上にはい上がる(温暖前線)ときに生ずる。何ずれにしても強風を伴うのが普通である。

- (2) 中天で稲光がするときは、近日中に風雨となる。

(豊玉村東)

- (3) 北の方に稲光り、又は黒い雲が立ち上がったときは雨。(豊玉村東)

稲光は雷光をいう。この俚言でいう雷は、前項(1)と同じく界雷を指すと思われる。つまり、前線の接近を意味している。なお、文中で“近日中”というのは、数時間後ぐらいと解したい。

- (4) 土曜を過ぎて、西が光れば風雨となり、犬嶽(南西

方向)、姫島方面(E方面)が光れば、雲多く、東寄りの風強く、海がシケル恐れがある。(中津)

西が光るということは、稲光りを指すと思われる。稲光であれば、前記した界雷の接近を意味し、風雨が近い。東方の姫島方面が光って、シケが近いことは、§7-1(1)を参照されたい。

(5) 朝から入道雲が高ければ雨。(野母崎)

夏の日中に起こる入道雲は、熱雷といわれるもので、この時は晴天である。しかし、朝から出ているのであるから、界雷かも知れない。いずれにしても、西の方に発達した入道雲があれば、雨が近い。

13. 生物と天気に関する俚言

生物の状態が天気に関係するような俚言は、昔から多数あるが、気象学的解釈は仲々つけ難いもので、ここでは省略した。

(1) 海岸ぞいの家、又は路上に船虫が多数はい上る時は、近々中にシケ。豊玉村東)

(2) ひるからトビが泣けば日和。(須佐)

(3) 朝トンビは雨。夕トンビは晴。(平戸)

(4) 船虫(アマメ)が家の中に入ると北西が吹く。(平戸)

(5) 鶏が夕方早く小屋に入れば天気。(佐世保)

(6) クモが夕方、掛糸より早く軒下に入ったら天気。(佐世保)

(7) トンビの高舞いは雨。(野母崎)

(8) 小バエのもやつくときは雨。(野母崎)

(9) 猫が手をしきりになめて、その手を額から頭にこすりつける時は晴、反対に喉から下へなめるときは雨、頭を耳越しになでれば雨。(豊後高田)

(10) 犬が草をかめば晴。(豊後高田)

(11) 馬が元気よくいななけば晴。(豊後高田)

(12) 牛がほえれば、くもり、風が吹く。(豊後高田)

(13) 家禽に不安のさまが見えれば雨の兆。(豊後高田)

(14) クモが巣をかけ始めれば晴の兆。(豊後高田)

(15) トンボが家に入ると大風の兆。(豊後高田)

(16) カニの高上りは雨の兆。(豊後高田)

(17) 朝ミミズが出れば晴。(豊後高田)

(18) 蛇が木に登れば雨。(豊後高田)

(19) 夜ハエが出れば翌日は雨。(豊後高田)

(20) 夕方ハトが鳴けば晴。(豊後高田)

14. その他の俚言

(1) 泉又は川の瀬音、汽笛が近く聞えるのは雨の兆。(豊後高田)

よい天気の日には、あまり聞えない音が、雨が近いときにはよく聞える。そんな時には、平常あまり吹かない方向から風も吹く。これは、雨の直前には、地面付近の大気の乱れが減少するので、音波の乱れが減り、通りがよくなるためである。もう一つは、湿度が高まると音速が増大することもあづかっている。

(2) 朝虹は雨、夕虹は晴。但し梅雨期は反対。(仙崎)

虹は、太陽と反対側で雨が降っていると、その水滴に当たった太陽光が、水滴内で反射屈折して出てきたときに見られる現象である。だから、朝虹は、東の方から光がさし、西の方で降雨があることを示し、まもなく雨が来ることになる。夕虹は、この反対で西方が晴れていることを示すので、天気はよくなる。梅雨期が反対というのは判らない。

(3) 港内で“アビキ”がはげしいときは、雨又は風が強まる。(須佐)

アビキは、低気圧や前線などの通過に深い関係があるが、これらの擾乱が無くても起こることもある。また、そのような風が吹いてから、アビキが起こることもあるようなので、前兆としてアビキを考えるよりは、同時的な現象として考えたい。

(4) シケの時は沖を通れ、浅い所は波が高く、波の質も悪い。(野母崎)

波は、沖合から海岸の浅い所に来るにしたがって、巻き波や、砕け波となって荒くなる。これは、波の長さ、海の深さとの関係から生ずるもので、波の長さに比べて、水深を十分でない所に来ると、波は尖って高くなる。だから、少々のシケでは、むしろ沖を通った方が危険性は少ないであろう。

(5) 一年中で4月が一番天気がよい。(野母崎)

一般に晴天がつづくのは夏であり、4月は晴雨の天気が周期的に変わることが多い。野母崎では、4月の天気が一番よいということであるが、4月でも、年によっては、高圧帯におおわれて、安定したよい天気がつづくこともあるので、このことを指すのかも知れない。